

氏 名(本籍)	武井 謙悟 (神奈川県)		
学 位 の 種 類	博士 (仏教学)		
学 位 記 番 号	博仏甲第38号		
学位授与の日付	令和2年3月20日		
学位授与の要件	学位規程第5条第1項該当		
学 位 論 文 題 目	近代日本における仏教儀礼の変遷 －仏教系雑誌に着目して－		
論 文 審 査 員	主査 駒澤大学教授		長谷部八朗
	副査 駒澤大学教授	博士 (文学)	矢野 秀武
	副査 駒澤大学名誉教授	博士 (文学)	池上 良正

## 論 文 内 容 の 要 旨

本学位請求論文は、標記の論題の下、仏教とくに曹洞宗系の雑誌（新聞）に掲載された、明治期から昭和の第二次世界大戦終了時に及ぶ時期の記事を手がかりに、仏教儀礼がメディアを通して人々に伝わる過程の考察をめざすものである。論文の構成は、序章、仏教儀礼の個別事例を扱う本章（全6章）、補論、終章の全9章からなる。

「序章」において、まず、本研究の目的とその前提となる問題意識を述べ、当の目的に接近するための二つの視座を提示する。次に、本研究に関係する近代仏教研究の動向と、仏教儀礼の研究史を辿り、本研究の意義を述べる。続いて、仏教系雑誌の記事の持つ特性をめぐる筆者の見解を示す。しかるのち、各章の要点を概説する。

「第1章」では、「葬儀」を対象とする。葬儀は、中世から教団の拡大に貢献し、近世では寺檀制度の成立に伴い、寺院経済の基盤となった。本章では、こうした伝統を有する葬儀が、近代社会の目まぐるしい変化のなかで遭遇した危機を、国家統制・他宗教・社会問題への対応という3側面から検討する。主な資料には、曹洞宗関連の『明教新誌』、『通俗仏教新聞』、それに浄土系の『浄土教報』を用いる。いずれも近代において20年超にわたって1000号以上発行を続け、多くの読者を有していたと見込まれる。第1節では、まず、明治初期、太政官布告による自葬禁止と神葬祭を推進する法令発布されたことに触れ、その一方で仏式葬儀を望む声もあり、葬儀や施餓鬼などの儀礼を機に、帰仏する事例を取り上げる。帰仏の理由として、神葬祭の形式が未整備で、体系的な追善供養システムが構築されていなかったことなどが考えられる。第2節では、キリスト教の葬儀に対する仏教側の対応を取り上げる。1884年に自葬が解禁されるまで、キリスト教による葬儀は違法であった。そこで本節は、自葬解禁後の状況を中心に論じる。大日本帝国憲法の発布で制限付ではあるが信教の自由が認められたものの、仏・耶対立は続き、内地雑居前後には激化する様子がうかがえる。そのような社会情勢の下、

仏教系雑誌には、葬儀をめぐる仏教側の反キリスト教的行動を讃える記事がみられる。しかし、明治後期になると、キリスト教とその葬儀に関する仏教側の反対運動の記事は減少していく。このように、国家神道やキリスト教への対応という課題に直面しても仏教葬儀は優位性を保持してきたが、この時期には葬儀の合理化・簡素化への対応といった新たな問題が生じてくる。第3節では、この問題を、告別式や、「永眠」というキリスト教由来の言葉が仏教者の間にも受容される状況などに着目して論じる。

「第2章」では、中世より現代まで続く、報われない死者を弔う追善供養の一つである「施餓鬼」の明治期における多様な事例をみていく。第1節で「新聞供養大施餓鬼」を紹介する。1876年、東京・横浜の新聞社数社が合同で浅草寺にて実施したものであり、38名の天台僧が出仕し、列席した各社の記者のうち、24名が祭文を読んでいる。祭文の内容から、法要の目的を分析すると、新聞紙上の死者の弔い、入獄している記者への祈祷、新聞記者の境遇の観衆への告知、言論の自由を求める運動などの側面が読み取れる。第2節では、貧窮孤児の救済を目的に仏教諸宗派合同で設立された「福田会育児院」が、死亡した孤児や関係者の供養のために施餓鬼会を定例行事化していく経緯を辿る。また、この行事は、日本の救貧施設を代表する「養育院」にも影響を与え、当院でも行われるようになる。これらは当時を代表する福祉施設だが、仏教教団がこうした社会的救済事業に参入する上で、施餓鬼は強力な後ろ盾になった。第3節は、明治期に発生した地震が、新たな施餓鬼実施の形を生み出した例を取り上げる。1891年の濃尾震災と96年の三陸地震津波を取り上げ、その被災状況が新聞・雑誌の報道と広告によって全国に伝わり、各地の寺院で追吊会が催された様子を、先行論文や『通俗仏教新聞』の記事などを通して述べる。その際、注目されるのは、法要と同時に演説会を開催する例や施餓鬼の際に義援金を募る例の記事がみられるようになったことである。第4節では、『通俗仏教新聞』を主な資料として、日清・日露の両戦争時に全国各地で実施された戦死者追悼のための施餓鬼の記事を取り上げ、検討する。この記事で特筆されるのは、日清戦争の戦死者法会における従軍僧の演説催行の例が散見され、また日露戦争の戦死者法会では、「怨親平等」の論理にもとづき、敵国の戦死者をも追悼することを趣旨とする例も見出せる。第5節では、『読売新聞』と『朝日新聞』を中心に、施餓鬼を実施する場所や供養対象の拡張に注目し、鉄道と動物に関する事例を検証する。近代における鉄道開業に伴い、沿線の主要寺院の施餓鬼行事に際して、臨時列車の運行や割引切符の発売がなされる事例を取り上げる。また、鉄道事故による死者を弔う施餓鬼の記事もみられるようになる。動物供養の歴史は放生会などの形で古代より行われてきたが、近代には、家畜施餓鬼の例が出てきて、現代のペット供養の兆しが見て取れる。

「第3章」では、近代に、曹洞宗行政当局の管掌のもとで実施された「授戒会」の動向を探る。第1節で授戒会に関する両本山の布達を6点紹介し、検討を加える。その内容からは、概ね、品格の伴わない戒師による授戒会の規制、教団行政の維持・発展を図るための収益源の確保の意図がうかがえる。第2節では、教団財政を支えることが期待された「授戒会」の近代における推移を考察する。『授戒会の研究』（曹洞宗宗務庁、1985）によれば、「授戒会」の開催数は1910年に初めて100回を超える。その理由として、同年に「曹洞宗授戒会修行法」が制定され、開催手続きが明確・迅速になった点が

あげられる。「授戒会」の開催数は大正期になっても好調に推移したが、やがて昭和期に入ると減退していった。第3節においては、両本山の貫首が全国を巡錫し「授戒会」の戒師を務めた記事、都道府県別の「授戒会」数と戒弟数、1917年をピークに「授戒会」が減少に転じている状況を指摘する。

「第4章」では、「禅会」の普及について、第1節で『禅道』、第2節で『大乘禅』の記事を中心に考察する。第3節では、1928年前後の居士たちの論説を取り上げ、かれらの主張に、日露戦争後の「修養ブーム」の影響を受け、軽い気持ちで参禅する居士と、「真実の道」を求めて参禅する居士を差異化する傾向がみられることを指摘する。第4節では、1930年以降の「禅会」参加者の多様化を論じている。この時期には、多様な層を対象に禅の普及をめざして「国民皆禅」のスローガンを掲げる論説が出てくる。こうして「禅会」数が上昇していく状況を、種々の雑誌を材料にして述べる。

「第5章」では、近代に実施された7度の「遠忌」を対象に、時系列に沿って各遠忌の特徴を把握する。僧侶中心の儀礼であった遠忌が、観光を目的とする参加者を受け入れていく過程や、国家との関係を指摘し、曹洞宗における同儀礼の特徴を明らかにする。第1節では、前近代の遠忌を、『永平寺史』にみる道元の遠忌に関する記述を通して述べる。また、総持寺に関する遠忌として、二祖・峨山の遠忌を取り上げる。これらの分析を下に、近世遠忌の特徴として、遠忌の際に全国の末派寺院へ勧募して伽藍整備を行うこと、そして僧侶中心の法会であることなどを論じる。第2節では、近代に行われた7度の「遠忌」を検証する。その結果、近代の「遠忌」は、僧侶中心の儀礼から一般の参詣者も取り込んだ儀礼へと変化したところに大きな特徴があると指摘する。また、「遠忌」中には、勅額や国師号が宮内庁から下賜されることで参加者の動員を後押しした点にも着目する。

「第6章」では、近代に誕生した仏前結婚式の変遷を辿る。第1節においてキリスト教の影響の下、仏式の結婚式が行われた例を紹介する。第2節では、雑誌『仏教』の主幹を務めた、曹洞宗僧侶の来馬琢道による仏前結婚式の様子と反響を述べる。第3節は、浄土宗・浄土真宗・曹洞宗における結婚式への取り組み状況を取り上げる。そして第4節で、神前結婚式に関する記事を論じている。

「補論」では、仏教系雑誌関係の目録、目次、複製版、データベースなどの資料整備の動向を検討する。第1節で近代仏教研究をめぐる資料の発見・入手の困難さ、第2節では資料整備に関する戦前の動向、第3節では戦後の動向、第4節では近年急速に発展してきた電子媒体による資料整備の状況を追っている。

最後に「終章」の第1節において、本研究の結論と意義を述べる。第2節では、近代と現代をつなぐ視座として大量消費文化の担い手である大衆と仏教の関係性を提唱する。また、今後の課題として、「受信側の検証」、「仏教界全体の検証」、「国外での日本の仏教儀礼の検証」を挙げている。

## 論文審査結果の要旨

「近代日本における仏教儀礼の変遷－仏教系雑誌に着目して－」と題する武井謙悟氏（以下、論者）の博士学位請求論文は、これまで研鑽を積み重ねてきた関連業績を集成する形で著された成果である。論題は簡潔に表現されているが、本書の内容に沿って、その意味するところを少しく敷衍してお

く。すなわち論者の主眼は、明治から昭和の第二次大戦に至る時期の日本において、仏教とくに曹洞宗に関する儀礼が、新聞も含めた仏教系雑誌類のなかでどのように記述され、情報として読者に発信されたか。また当の情報が読者やその人的ネットワークにいかなる影響を与えたと言えるかを考察することに置かれている。

さて、第二次大戦後に辻善之助の著した一連の明治仏教史に関する論考は、同時代を仏教衰退化過程とみる歴史観を基調としていた。そして、この歴史観が以後の近代仏教史研究に影響を与え、辻仏教史学の継承、批判、克服の方向へと展開したのである。しかしその後、こうした辻仏教史学のくびきから脱して、新たな視点に立つ近代仏教史学の在り方を打ち出そうとする見解が、吉田久一、柏原裕泉、池田英俊などによって提示されていく。

このうち池田英俊は、広く仏教諸宗を視野に入れつつ、とくに曹洞宗教団の明治期における動向を、仏教系雑誌・新聞を主要な典拠として追究している。とはいえ、池田亡き後、故人の開拓した研究領域を継承・発展させていく動きは、目下のところみられない。したがって、本書にみる論者の研究は、曹洞宗系雑誌・新聞を主要な分析手段として、近代における曹洞宗教団の教化方策の諸相を検証するという枠組みにおいて、池田の研究との接点を有していると言えよう。ただ問題は、曹洞宗による教化の諸相のうち、どの側面に目を向けるかである。かかる視座から両者の関心を比較すれば、池田は、明治政府の神道国教化政策を背景に曹洞宗教団が全国に設置した教会・結社組織に着目し、論者は、曹洞宗教団の僧俗が関与して実施された儀礼行為を主題に据えている。もとよりこれらの主題は、いずれも当時の曹洞宗における教団近代化への動きを理解する上で重要な手がかりを提供するものと言える。

論者の学位請求論文の構成は、目次、凡例、序章、本章、補論、終章、参考文献一覧、初出一覧、謝辞、巻末資料より成るが、序章から終章までの各々の章・節と、巻末資料の表題を以下に記す。

## 序 章 問題の所在

### 第1節 本研究の目的と視座

### 第2節 本研究の意義 先行研究の整理

#### 第1項 近代仏教研究と儀礼

#### 第2項 仏教儀礼研究の変遷

### 第3節 本研究の対象と手法

### 第4節 各章の概略

## 第1章 葬儀問題への対応はじめに

### 第1節 国家統制への対応

#### 第1項 明治初期

#### 第2項 明治後期以後

### 第2節 キリスト教への対応

#### 第1項 自葬禁止下の先行研究

#### 第2項 自葬解禁後の仏・耶対立

### 第3節 近代化・合理主義化への対応

#### 第1項 仏教葬儀の優位性と新たな問題

#### 第2項 「永眠」という言葉をめぐって おわりに

## 第2章 施餓鬼の諸相－明治期を中心に－

### はじめに

#### 第1節 新聞供養大施餓鬼

##### 第1項 儀礼内容

##### 第2項 新聞記者の祭文

##### 第3項 評判とその後

#### 第2節 社会事業と施餓鬼

##### 第1項 福田会

##### 第2項 養育院

#### 第3節 明治の震災と施餓鬼

##### 第1項 濃尾震災

##### 第2項 三陸地震津波

#### 第4節 日清・日露戦争と施餓鬼

##### 第1項 日清戦争

##### 第2項 日露戦争

#### 第5節 鉄道・動物一場所と対象の拡張

##### 第1項 鉄道と施餓鬼

##### 第2項 動物と施餓鬼

### おわりに

## 第3章 授戒会の動向－曹洞宗機関誌を中心として－

### はじめに

#### 第1節 授戒会に関する布達

#### 第2節 授戒会数の推移

#### 第3節 授戒会の分析

##### 第1項 貫首による授戒会

##### 第2項 地域性

##### 第3項 授戒会数減少の要因

### おわりに

## 第4章 禅会の普及－『禅道』・『大乘禅』の記事を中心として－

### はじめに

#### 第1節 『禅道』に見られる禅会

#### 第2節 『大乘禅』に見られる禅会

#### 第3節 居士禅に対する評価の対立

#### 第4節 1930年以降の動向－参加者の多様化

おわりに

### 第5章 近代曹洞宗における遠忌の変容

はじめに

#### 第1節 前近代の遠忌－道元を中心に

#### 第2節 近代の遠忌

第1項 瑩山 550回忌

第2項 懷牂 600回忌

第3項 道元 650回忌

第4項 峨山 550回忌

第5項 瑩山 600回忌

第6項 懷牂 650回忌

第7項 後醍醐天皇 600回忌

おわりに

### 第6章 仏前結婚式の変遷

はじめに

#### 第1節 キリスト教の影響

第1項 在家同士の結婚式

第2項 藤井宣正と井上瑞枝の結婚式

#### 第2節 来馬琢道の結婚式

#### 第3節 宗派別の展開

第1項 浄土宗

第2項 浄土真宗

第3項 曹洞宗

#### 第4節 神前結婚式との関係

おわりに

### 補論 近代仏教資料の整備史

はじめに

#### 第1節 近代仏教資料の困難

#### 第2節 戦前の動向

#### 第3節 戦後の動向

第1項 龍谷大学の取り組み

第2項 仏教系雑誌の活用

第3項 一般新聞の動向

#### 第4節 電子化する近代仏教

おわりに

### 終章 近代仏教儀礼論の構築に向けて



## 第1節 本研究の結論と意義

## 第2節 新たな視座と今後の課題

### 第1項 大衆と仏教

### 第2項 今後の課題

## 巻末資料

### ①『禅道』掲載の禅会一覧表

### ②『大乘禅』掲載の禅会一覧表

### ③仏前結婚式一覧表

本論文は、近代日本における仏教の動向を、「儀礼」を対象に据え、雑誌・新聞などの記事を通して考察するという、従来ほとんど手付かずのままであった研究領域へのアプローチを目指しており、近代日本仏教史研究に新たな地平を拓く可能性を有する研究と言える。本論文は、それを実現するための起点となる成果であり、したがって今後、資料の開拓や方法論の吟味などを図り、研究のさらなる精緻化を進めていくことが期待される。そうした観点から、本論文の審査において、評価と課題に関する種々の意見が交わされた。以下で、その要点を述べる。

まず方法論については、「序章」で本研究における次の二つの視座が示されている。

①実践＝仏教儀礼を、身体性を伴う慣習的な行為とする。

②近代日本において、実践への指向性が仏教系雑誌などのメディアによって左右される。

「序章」の言説から、論者がこのような視座を打ち出した経緯を探るならば、次のように理解できよう。視座①で仏教儀礼と実践を等号で結んでいるが、別の箇所では、仏教儀礼を「身体的実践」とも表現している。この「身体」という語を使用した背景に、論者は「ハビトゥス」概念を据えている。「ハビトゥス」は、マルセル・モースやピエール・ブルデューが用いたことで知られる概念である。ちなみに、ブルデューによれば、「ハビトゥス」とは持続性をもち移調（変化）が可能な心的諸傾向のシステムであり、それは、過去の経験や社会的習慣が身体の中に刻み込まれ統合されることで機能するという。また、「実践」という語に関しては、磯前順一の見解を引きつつ、次のように述べる。プラクティス（非言語的慣習行為）とビリーフ（概念化された信念体系）を対置し、プロテスタント的宗教概念を受容した近代日本では、前者に対する評価は後者の下位に置かれている。当時、キリスト教を軸とするビリーフ的な「宗教」観が形成されていく一方で、近世庶民の宗教的生活の一部は、淫祠邪教として貶められていった。そして、新仏教徒同志会の機関誌『新仏教』の要綱に「我徒は従来の宗教的制度及び儀式を保持するの必要を認めず」とあるように、仏教儀礼が批判の対象とされた。論者によれば、こうして「近代に困難にあった仏教儀礼が、なぜいまでも実践されているのか」という問いが、この研究の出発点であったのだという。その際、問題となるのは、この「実践」をどう捉えるかであるが、論者は「自覚的な信仰にもとづく行為よりも、慣習的な行為」とみる。つまり上述のビリーフにもとづく行為よりも、プラクティスとしての行為を指すというのである。このように論者

は、「ハビトゥス」と「プラクティス」の概念を援用しつつ、仏教儀礼を、変化を伴いながらも持続性をもつ「慣習的行為」と捉える。これが①の視座である。

そして、近代における人々あるいは社会の仏教儀礼に対する見方や関わり方が、仏教系雑誌や新聞によって影響を受ける状況に着目する立場が、視座②である。「ハビトゥス」は当該社会の構造を反映しつつ形成されるわけであるから、劇的な社会変化を生じた近代において従来からの「慣習的行為」が持続性を保つためには、勢い、時代に沿った何らかの変化を受け入れることが必要になる。その変化に適応し得ない場合は形骸化し、やがて消滅の途を余儀なくされていく。出版メディアの著しい進展は、正に近代日本を象徴する現象であった。

では、仏教儀礼が、近代においてどのような変化を呈し、実施されていたのか。仏教系雑誌・新聞の台頭は、そうした儀礼の変化に関する情報を、社会に広範かつ大量に送り込むこととなった。加えて、メディアが、仏教儀礼に対する当時の人々や社会の認識に及ぼした影響を考える際に重要と思われるのは、儀礼をめぐる記名の論説である。その際、執筆者の社会的知名度が高ければ、それだけ影響度も増すはずである。雑誌・新聞は、母体となる機関のイデオロギーを反映しており、禅の普及を目的とした団体の雑誌であれば、禅関係の情報が多くなることになる、と論者は述べる。言い換えれば、雑誌の母体となる機関や編者・記者のイデオロギーが、仏教系雑誌という装置を通して発現するというのである。

明治以降、読売新聞・朝日新聞・萬朝報などの日刊紙を始めとする新聞や多分野にわたる雑誌が陸續と刊行された。こうしたメディアの提供する多様かつ豊富な「情報」を社会・文化的資源として利活用することが、日本の近代化を大いに促進させたとも言えよう。仏教系雑誌・新聞の台頭も、このような「情報」の流通をめぐる様相が著しく変化していく当時の時代相を映し出している。もとよりメディアは、その対象とする社会的領域の世論形成に与る、いわばオピニオン・リーダーの役割を担っている。その場合、出版組織の規模や運営方針にもよるが、組織を担う特定の人物が強力なオピニオン・リーダーとしての役割を果たしている例もみられる。興味深いのは、近代とくに明治期の仏教系メディアに、この種のオピニオン・リーダー的人物が多々見受けられる点であろう。その代表的な存在として、本論文の拠って立つ主要な資料の一つである「明教新誌」の主幹・大内青巒を挙げることができる。曹洞宗に限らず、当時の仏教界を代表する啓蒙思想家であり、仏教教理の大衆化を活動の基本とした青巒にとって、この「明教新誌」は最大の活動拠点であった。同誌のなかで儀礼の近代的様相を論じること、結局は、近代教学の確立を目指すための営為であったといえるのではない。俗を包括した新たな教化の在り方を編集方針の主軸に据えたこの種の雑誌類のなかには、同様に教理の大衆化をめざした有名な仏教者を編集主幹とした例が他にもみられる。そのことを勘案するならば、ビリーフとプラクティスは対置概念ではなく、当時はむしろ、プラクティス概念もまた、ビリーフ概念を基調とする状況のなかで、在家教化の手段と位置づけられるのではなかろうか。しかもこの両者の関係は、仏教内の関係で完結するものではなく、神道・キリスト教・民俗信仰などを包括した広い視野から把握する必要がある。

以上のような、当時の仏教系雑誌・新聞、延いては出版メディア全体を取り巻く社会状況を踏まえて、本論文の取り上げる事例の近代的变化や創出の諸相を捉え返してみると、興味深い事例の記述がみとれる。具体例を以下に掲げておく。第1章の「葬儀」については、近世の檀家制度の下で寺院



経済の基盤となった仏教葬儀が、近代になると、政府の神葬祭奨励やキリスト教との葬儀対立が表面化してくる。それに対して仏教系雑誌は、政府による神葬祭普及策にもかかわらず、その葬儀システムの未整備なるが故に再び「帰仏」した例や、仏・耶対立の状況下、仏教葬儀の優位性を説く論説を掲げる記事が出てくる。また、キリスト教の教義に発する「永眠」の語に対し、最初は批判的な記事がみられたが、次第に一般紙などにその語を用いた「黒枠広告」が増えてくると、仏・耶の教義論争より、こうした他教の要素を取り込みつつ仏教葬儀の実践を優先する僧侶の例が仏教系メディアで取り上げられるようになる。こうした記事を通して、これまで習慣的に行ってきた仏教葬儀の優位性が改めて認識されるというのである。

近代の施餓鬼の記述でまず特徴的なことは、供養の対象が、従来の檀信徒の範囲を超えて、孤児院の死者、震災による死者、日清・日露戦争の戦死者など、社会状況の変化に応じて拡大されていった点であろう。それと共に、とくに震災後の施餓鬼を含む追悼儀礼と「仏教演説会」をセットで施行する例が目につくようになる。「明教新誌」を始めとする近代とりわけ明治期の仏教系メディアには、東京を中心に各地で「仏教演説会」が催される旨の記事や広告が頻繁に掲載され、その多くは、キリスト教との教義論争を目的とする内容である。このように、仏教側の主催者が死者救済の供養儀礼を、キリスト教に対する仏教教義の優位性を説く催しによって補強する形で教化を実践している点は興味深い。

近世曹洞宗教団の歴史において、「授戒会」の果たした意義は大きいが、一方で授戒は、死後の出家のための儀礼の一環として葬儀に取り入れられ、在家教化の重要な手段となった。明治期になると、この「授戒会」は教団の近代化を図るための主要な収益源とされ、大内青巒が編纂した在家向け聖典である『修証義』の理念を体現する法会として、両大本山の貫首も、全国各地で戒師を務めるようになる。また、女性の参加を促したこともあって、大正期には開催数のピークを迎えるが、昭和に入ると減少傾向を辿っていく。7日間という期間の長さや多大な費用が、物資抑制を図る戦時態勢に適さなかったことが要因であろうという。

次に、論者は儀礼の側面から禅を捉える立場から、近代の「禅会」に注目する。寺院など一定の場で開催される在家向けの坐禅会であるが、1924年創刊の月刊雑誌『大乘禅』によれば、提唱の講本として、『碧巖録』に続き、『修証義』の多さが目立つという。当時の曹洞宗が「禅会」を通じて在家布教を推進していたことが分かる。やがて昭和に入ると、文部省の「宗教的情操」を涵養する政策に加え、教団側の民衆を対象とする積極的な禅風挙揚への声の高まりも与って「禅会」の開催数は一層の増加をみたのである。

近世までの曹洞宗における「遠忌」は、伽藍整備のための勧募を主要な目的として、主に僧侶が参加する形で祖師の忌日付近に開催されるという特徴があった。それに対して、近代の遠忌は、僧侶中心の儀礼から一般参詣者も参加する儀礼へと変化した点が大きな特徴と言える。

仏前結婚式は近代になって新たに創出された儀礼だが、結局その普及は進まなかった。その理由として、仏教教理と抵触するような盃事を導入するなど、仏教特有の身体性を打ち出した儀礼の形態を生み出せなかった点や、皇太子の結婚式に際して制定された「皇室婚嫁礼」を正当性の根拠に神前結婚式を積極的に推進した神道側の姿勢も関係しているという。

このように儀礼の動向を個別にみていけば、近代化に伴う顕著な社会の動きを背景に、儀礼の形態

にもさまざまな変化が生じている様子が伝わってくる。その一方で、事例の全体を俯瞰して言えることは、その変化が広く一般の人々を視野に入れる方向で生じている点である。「施餓鬼会」と「演説会」の同時開催、「授戒会」や「禅会」における『修証義』の使用などは、そうした傾向を端的に表している。前述したように、それは、教団近代化に向けて、大内青巒などを中心に展開された在家教化の運動との関係のなかで捉えるべきものであろう。その意味では、論者のいうプラクティスは、ビリーフと補完し合う関係にあったと言えよう。

このように眺めてくると、近代の仏教系雑誌・新聞は、仏教儀礼を研究俎上に載せる際にも十分な資料的価値を持ち合わせていることが分かる。本研究において示された著者の資料博搜の意欲と努力と成果は、雑誌・新聞などのメディアに依拠する近代仏教史研究に新たな可能性をもたらすものと言えよう。

最後に、今後の研究の展開に向けて本論文の課題と思われる点を述べる。まず、本研究の目的を追究する上で、「ハビトゥス」概念が果たしてどれだけ有効であったか。その辺りが読み手の側に明瞭に伝えられたか、いささか疑問を感じる。論文構成における仮説の設定もやや明確さを欠いているように思われる。そもそもメディアによって発せられた仏教儀礼に関する情報の流通を「ハビトゥス」概念を適用して捉えようとするなら、その儀礼情報を送る記者・編者と受け取る読者の両者を視野に入れて考えねばならないはずである。しかし本論文は、論者も自ら指摘するように、読者側の考察を欠いている。また、近代日本における多くの仏教儀礼の在りようは、近世からの慣習的实践を背景に、一般民衆を広く巻き込む形での教団近代化が要請される中で、民衆教化策の手段として伝統的な儀礼の再編成を試みたのが、当時の仏教諸教団の趨勢であったと言える。その意味では、教学・儀礼・教団組織のいずれの位相においても、進むべき改革の途を一にしていたのである。

また、当時の仏教系雑誌は概して特定の宗派色を帯びており、したがって、往々にして当該宗派の護教的性格を含んでいる点も、留意しなければならないであろう。

以上、残された課題もみられるが、これまで未開拓であった領域に挑み、膨大な資料を博搜して、仏教儀礼研究に新機軸を打ち出したことを評価し、審査委員一同、本論文に対して博士の学位を授与するとの結論に至った。